

『姓』無き少女は『家  
族』を得て

タマモワンコ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

才能が無いという理由で捨てられた少女、蓮（レン）。

それなりに適当で整備と牛乳大好きな少女は、新たな家族を得て開花する……………は？

この小説は、ガールズ&パンツァーの二次創作です。また、独自設定や他作品ネタ、クロスオーバー等を含みます。

この小説では、

- ・少女がチハでパーシングを倒したり
  - ・少女が戦車を魔改造したり
  - ・少女が戦車を一から作ったり
  - ・少女の乗る戦車がドリフトしたり
  - ・少女の乗る戦車が空を飛んだり
  - ・少女の乗る対空戦車が活躍したり
  - ・少女がゲームの戦車を作ったりなど
- ……があります。

上記の事をご承知の上で……ゆっくりしていつてね！

……上の例の大体を原作とかでやっているとツツコンではいけない。

追記：12／6　　よりにもよってタイトルの漢字を間違えるという大ミスをやらかしてましたのでタイトルを修正しました。

変更：性↓姓

# 目次

第一話	捨てられたレン	1
第二話	キレたチヨ紙	13
第三話	アリス・イズ・ワンダーガール	28
第四話	三姉妹の宝探し	40

## 第一話 捨てられたレン

「——貴女には、才能がありません。そして才能の無い貴女はこの『田路』の家には不  
必要です。すぐに必要なものだけを持って出ていきなさい。」

母（だと思われる人）は、私を呼び出してそう言った。

母に逆らうつもりもなかった私は、少しの荷物と父から渡されたお金を持って、家の  
門を出た。

そして門を出たところで一つ、私は疑問に思った。

——あれ、私はこの先どうすればいいのだろう。

たった今路頭に迷っている私の名は『蓮<sup>れん</sup>』。神奈川にあるとある戦車道の名家の一つに生まれた、現在進行形で不幸な少女だ。

行く宛の無い私はとりあえず近くにあったエムドナルドに入り、窓際のカウンター席で無料Wi-Fiとノートパソコンを使ってどうすればいいのか調べてみているのだが…

「…やっぱり児童相談所なのかな…？でも家に送り返されるだけなんじゃないかなあ…。」

どうすればいいか、さっぱりわからない。

ネットには大人向けの方法ばかりで、子供については児童相談所に連絡するといいよ

！ぐらいしか書いていない。

もし私が20歳前後とか、もつと年を食っていたならすぐにでも整備の仕事を探して、なんとか食べていけるようにするのだけれど……生憎まだ私はたった9歳。流石に雇ってくれる所はないだろう。

「むむむ。」

何がむむむだ！とセルフツツコミを入れつつ買っておいたポテトをかじる。

どーしてこーなったかなー。というか私がどこかで野垂れ死んだらあの家としてもマイナスだし分家とかあるんだろうからそっちに寄越すとかすればいいのに。

むー。

「隣、良いかな？」

むーむー唸っていると、後ろから声をかけられる。

振り返ると、茶色の髪をした同じくらいの年の女の子がトレイに山盛りのポテトを乗せて立っていた。……文字通り、山盛りのポテトだ。いや、山盛りというよりも山だ。チヨモラマン級だ。

「あ、はい。大丈夫です。」

少々引きつつも言葉を返せば、

「それじゃあ、失礼するよ。」

そう言つてその女の子は隣の席に座つた。ううむ、なぜ他にも席は空いているのに隣に……？これでは唸れないではないか。

うー、うー。

どうするかなあ…。

うー。うー……！

「ふふっ。」

頭の中でうーうー言つてたらさっきの女の子に笑われた。くっ、ジト目で見てやるぐらしいかやれることがない……。じー。

「…ああ、ごめんね？何かを悩んでる君の顔が面白くてね。」

「…そうですか。」

うん、すつごいばかにしてるな……。はあ…。

「あ、まだ名前を言つていなかったね。私は風美花<sup>フミカ</sup>。風に美しいに花でフミカさ。よろしくね？」

「…いや、名前を教える意義が見当たらないのですが。」

「こんなところで会つたのも何かの縁さ。そう思わないかい？」



「そうかな…？　そうかも…？　まあ、減るもんでもないしいいか。」

「まあ、そうですね。私は蓮。ハスとかいてレンです。よろしく、風美花。」

「よろしく、蓮。それで、何を悩んでるのかな？　恋愛かい？」

恋愛…生まれてこのかたそういう感情を持ったことはないなあ…。というか今や誰とも関わりがない状態なのよね…。

「恋愛どころか人間関係と言うものの自体が今は消滅してますね。なんにせよ、この問題は貴女に話しても意味はないです。」

「いや、意味はあるさ。悩みというのは誰かに話すだけでも解決したり、踏ん切りがつくそうだからね。というわけで話してくれるよね？」

そう言いつつ風美花はイイ笑顔でこちらに圧をかけてきた。どれだけ聞きたいのさ。

「はあ…。わかりました。長くなりますがいいですか？」

「かまわないさ。ポテトの貯蔵は十分だからね。」

「いや、明らかに多すぎると思いますが。まあいいです。」

そう言いつつも、ポツポツと話す私なのだった。

私が生まれたのは『田路』というそれなりには有名な戦車道の名家でした。

家元である母親：いえ、実際に母親なのはわからないので家元とも呼びます。なにせ母親らしいことなんて一つもされてませんから。家元は聖グロリアーナ女学院で副隊長を勤めていたらしく、教えていたのも聖グロリアーナで好まれる浸透強襲戦術、使う戦車はチャーチルとマチルダⅡ、あとクルセイダーのみといった感じでした。ですから田路流の人間の多くは皆、聖グロリアーナに入学していました。

私はその家で：んー、事実上の育児放棄を受けていましたね。5歳位までは乳母さんが面倒を見てくれましたが、小学校に入学する頃には姉の方の世話に回されてしまつてそれ以降はほぼ全てが自分でやらなければなりません。朝起きて牛乳を飲んで体操をして牛乳を飲んでご飯を炊いて目玉焼きを焼いて食べて牛乳を飲んで朝から晩まで牛乳を飲みつつ他の門下の人たちと戦車の練習をして、ふらふらしながらレンジで朝炊いたご飯をチンして目玉焼きを一枚つくつて食べて牛乳を飲んで整備をして牛乳を飲んで寝る。そんな毎日でした。牛乳を飲み過ぎ？貴女のポテトに比べればましです。

：何故育児放棄を、ですか？父親が：あ、父は田路の家に婿入りしてきた整備士で、と

ても腕のいい整備士なんですよ。こっちは色々甘やかしてくれたり、助けてくれたりしたので確実に父親です。それで父親が家元に聞いたところ……ただ一言、『才能が無いから』と言ったそうです。

…ええ、才能です。なんの才能か？大隊長の才能だそうです。いやー、ただ隊長の才能が無いだけで育児放棄された挙げ句捨てられるとか戦車道は魔境ですね。

いや、別に車長としては普通らしいですよ。ただ、家元のお眼鏡には叶わなかったのと、比較対象になる才能溢れる姉がいるらしいだけで。

育児放棄が始まってからは十両位の部隊の隊長にされて家元に課せられる無理難題を相手取る毎日でした。マチルダⅡ十両でチャーチルⅦ五両を倒せとか普通無理でしょう？二ポンド砲でどうあの75mm乗つけた馬鹿みたいに硬いチャーチルⅦを倒せと。仕方ないので森に籠って穴を掘り木を倒し崖を崩しとほぼゲリラのような戦い方をしてなんとか二両潰したところで全滅しましたよ。ちなみに姉の方は同じ条件で優雅に四両撃破したそうです。化け物め。

…ああ、すいません。少しあのとときの怒りが蘇っただけです。まあ、その後からは才能がないってんなら仕方ないってことで父に整備を習って、門下の車両の修理をしつつ家元の無理難題を受けていました。日々の癒しは牛乳と整備だけでしたね。整備も、いつも必ずクルセイダーのリミッターを外しては大破させる馬鹿が居たので治す車両

には困りませんでしたし。

そんなこんなで三年間、なんだかんだと……まあ楽しく過ごしていたんですね。父が育児放棄が始まって以降は家にいるときは常に構ってくれましたし。ただ、突然『そうだ、チャーチルをチャーチルクロコダイルに改造しよう』とか、『いい加減チャーチルにも飽きたしブラックプリンスを一から作ろう』とか、『そもそもイギリス戦車に飽きたしドイツ戦車でも作ろうか』とか、『二次大戦の戦車ばかりなのもあれだしシエリダン戦車でも作ろうか』とか、『戦車も飽きたしスピットファイアでも作ろう』とか、『せっかくだからシーフアング作ろう。あ、あと空母も！』とか言い出したりして、しかも本当にやるのは止めてほしかったですね。何がどう転んだら戦車とかを一から作るという発想になるんですか……。流石に空母は止めましたよ。

え、私も一から作れるかですか？設計図と資材と設備と時間があれば多分。船はわかりませんが。

まあ、そんなことはどうでもいいですね。結局三年間平和……？に過ごしてたんですが今日遂に家元が見きりをつけて私をほっぽりだした、といったところですよ。

「…とまあ、話はここで終わりなのですが…風美花、どうかしましたか？」

話の途中でもちよくちよくツツコミを入れていた風美花は、今は何かを考えている…  
ようだ。

「…蓮、もし君が良ければ、私を頼ってみないかい？私はともかく、私のお母様ならなんとかできるかもしれないよ。」

…まじで？

「それは本当ですか、風美花？」

「ええ、私のお母様はそれなりに有名な人だからね。何かしらの手はとれると思うんだ。」

…なるほど、どうするか。助けを受けるか、受けないか。

…受けないわけじゃないね。だってほぼ手詰まりだし。

「…わかりました、助けてください、風美花。」

「うん。……その前にポテトを食べようか。いるかい？」

そういう風美花の目の前には、未だ山のようなポテトが積み重なっている。さつきまでがエベレストなら、今は八甲田山くらいだろうか。どうやら風美花は遭難したようだ

が。

「……食べきれなかったんですね？」

「ははは……まさか。」

あ、露骨に目を逸らした。

「もう……。それじゃ、いただきます。」

《視点：風美花》

——彼女の隣の席を選んだのは、本当になんとなくだった。

戦車道の関東大会で優勝して、ホテルへの帰り道でエムドナルドを見つけたので一度やってみたかったポテトの山盛り買って見たのが発端だ。

ポテトをもって席を探したときにふと目に入ったのが、しつぽのように後ろで一つにまとめた金色の髪を喰りながら揺らす彼女だった。

それで声を掛けて——その碧眼に視線が吸い込まれた。俗に言う一目惚れ、というやつなのだろう。私が男ならすぐにでも告白していたかもしれない。彼女は山盛りのポテトを見て引いていたけど。

彼女の許可も下りたので隣に座って、ポテトをかじるのも忘れて彼女の顔を横目で見ていて——笑ってしまった。

なにせ表情がコロコロと変わるのだ。見ていて面白かった。

ジト目でこちらを見る彼女に謝って、私は名前を名乗った。名字を言わなかったのは、その名を出すと皆一歩引いてしまうからだ。『島田』の名は私に友を与えてくれなかったから。

名乗られた彼女は少し名乗ることを躊躇ったが、名乗ってくれた。『蓮』、『ハス』と聞いてレンです』と。

とても、嬉しかった。その時初めて、対等な人間ができたように感じたからだ。

その嬉しさのまま、彼女へ私は悩みがあるのなら話すようにいった。彼女の事をもっと知りたかったし、もし私が、風美花が力になれるのならなりたかったから、尤もらしいことを言って話してもらった。

だが彼女の問題はただの風美花には解決できないような問題だった。

彼女は、捨てられたのだ。箱に積めて山に捨てるようなよくあるフィクションよりは

優しい捨て方かもしれないが、それでも捨てられたのだ。

父親はともかく、家元である母親は蓮のことを娘としては見ていなかったのかもしれない。もしかすると、道具のようなものと考えていたのかもわからない。蓮の父親には悪いが、そんなところに蓮を返すべきではないだろう。

だが、私だけではどうしようもない。

ならば——使えるものは使うべきだろう。

『島田』の力を。

たとえば、蓮と離れることになっても。



## 第二話 キレたチヨ紙

結局二人で泣きそうになりながら山を成しているポテトを食べきり、どこかに電話をした風美花に地下鉄なんかを乗り継いでつれてこられたのはとても高そうなホテルだった。

…高そうなホテルだった。

うん、なにこれ。近くに観覧車とか見えるんだけど。

生まれてこのかた家と学校と近くのスーパーぐらいしか行ったことがない箱入り娘にはこれはハードルが高いよ風美花。

「…どうしたんだい、蓮？入るよ？」

く、こつちの気持ちを知らないのかはわからないが軽々しく言うなあ…。

「が、頑張ります…！」

「？」

き、気合い、入れて、行きます…！

ホテルで私と風美花を待っていたのは風美花と同じ茶髪で、そして風美花と似た雰囲気の時折見え隠れする女性だった。

「ただいま、お母様。」

「おかえりなさい、風美花。それでその子が…」

「は、はい。蓮と言います。」

「蓮ちゃんね。私は島田千代しまだちよよ。よろしくね?」

「はい、よろしく願います。」

やはり、この人が風美花のお母さんの千代さんだった。

「それで? 突然電話で『子供を一人引き取れないかい?』なんて言い出して本当に連れてきちゃったみたいだけれど……そうね、なにか面白いポイントでもあるのかしら?」

…いや、面白いつてどういうことさ。面白いつて。

「そうだね…まず、戦車道の基礎はある。そして戦車に限らずいろいろな物の整備ができる。そして設計図と資材と時間があれば戦車でも飛行機でも一から作れる。これでどうかな?」

いやいや、それでいいの…？

「なるほど、面白いわね。いいわ、とりあえず話は聞きましょう。」

ええ…。いや、面白いつてなにさ…。いや、それで交渉のテーブルについてくれるあたりが風美花の母親なのか…？

「よし、それじゃあ蓮、さっきの話を話してくれるかい？」

「…わかりました。」

話をしよう。あれは今から36万……………

あ、これは違うや。

少女説明中……………

「…というわけです。」

風美花と大体同じ話を話したのだが、『田路』の名前が出てきたあたりからずっと千代

さんはなにか考えているようだった。風美花のように途中でものがしがしと質問を入れてこない辺りは大人である証明なのだろうか……？

考えがまとまったのか『…なるほど、大体わかりました。』とどこかのもやしのようなことを言った後、千代さんは顔をあげた。

「全くあの馬鹿副隊長は……。はあ、風美花、今日はこのホテルで蓮ちゃんと一緒に泊まって頂戴。」

…なんでさ???

「お母様はどうするの？たしか二人部屋を一つしかとつてないでしょう？」

「もともと飲みに行つてくるつもりだったから問題ないわ。それじゃ、私は用事ができたらからちよつと行つてくるわね！」

「どこにいくのさ……」

「そりゃあ…馬鹿なことをした副隊長を殴りに、よ！風美花は疲れてるでしょうし、今日はゆつくりしなさい。蓮ちゃんもとりあえず今日はゆつくりしててね？とりあえずどうにかなるかもしれないからね。」

「はい、わかりました。」

「了解、お母様。………あ、そういえばお昼のレシートを渡すのを忘れていたよ。はい、お母様。」

「ああ、お昼は一人で食べたんだったわね。ごめんね、一人で食べさせ……て……」

何故か千代さんが固まってしまったけど、どうしたんだらう。お昼ってあのポテトだよね……ああ、なるほど。

なにかを察知した風美花が逃げ……られない。肩を既に千代さんが掴んでた。恐ろしく早い掴み、私でも見逃しちゃうね。

「待ちなさい……風美花……？このレシートに書いてある『ポテトLサイズ×35』っていうのはどういふことかしらあ……？」

「……ポテトが言っていたのさ、ポテトを山盛り食べる、つてね。」

風が語りかけてくるとか風美花はすごいですね。でもポテトは食べきれないんですよね。

「結局一人では食べきれなくて、二人して必死にポテトを頬張る事になりましたけどね。」

「……蓮、余計なことは言わないでくれ。」  
やだ。

「……はあ。この事は家に帰ってからでたつぷりと説教することにするわ。全く。」

「疲れているからそれはありがたいかな。それじゃ、私たちは部屋に行くことにする

ね。」

「ええ。変なことはしないようにね。」

「はい。」

…うーむ、結局風美花と二人で一晩過ごしやすい。まあ……せつかくだし夜景とかも楽しむことにするかな。

…我ながら適当な性格だなあ。

《視点：千代》

風美花と蓮の二人と別れた後、車に乗ってとある人物に電話を掛ける。

プルプルと音が聞こえて五回目目で彼女は電話に出てくれた。予想よりも早かったのはラッキーなのだろう。

『…もしもし。』

「——久しぶりね、『田路蘭』？」

『ッ！ 島田、千代……！ 何の用ですか。下らない話なら切ります。』

「あら、なんの話か聡明な貴女ならわかるんじゃないかしら？ 胸に手を当てて考えてみなさい。」

『……田路流としては、今日の大会に意味があるとは考えなかったため出場しませんでした？』

うん、違う、そうじゃない。確かに風美花が出場していた今日の関東大会に蘭の娘の凛ちゃんが出場してなかったのは思うところはあったけど。

…蘭はこういうときに変に抜けていたりするのよね。高校生の時もブリーフィングをぼーつとしていて全く作戦を聞かないまま試合をしたこともあったりしたなあ…。

「いいえ、違う、そうじゃないわ。…貴女の娘の事よ。」

『…娘？ ああ、蓮のことですか。それが何か？』

「…これは電話で話すようなことではないわ。今からそつちに行くから。大体40分を着くけど大丈夫かしら？」

『は？ 別に用事はありませんが…』

「なら行くわね。それじゃ。」

『いや、待て島』

プツッ

蘭がなにか文句を言おうとしたのを無視して電話を切り、私は車のエンジンを掛けて出発した。

田路流は戦車道の流派でありながら神奈川県横浜市のど真ん中という大都市に近い位置にある珍しい流派だ。

日本戦車道の流派で特に有名であるのは私が所属する島田流と現在西住かほが家元を勤めている西住流の二つだが、けてこの二つの流派しかないわけではない。東北に拠点を置き夜戦を得手とする玉田流、瀬戸内に拠点を置き戦車を小規模艦艇と捉えて戦う村上流、紀伊に拠点を置き自走砲部隊を砲艦と考えて近代砲雷撃戦の戦術を基に戦う熊野流など、各地に流派が存在する。



そんな中でも特に人気があるのが田路流である。他の流派が比較的交通の便が悪い所に拠点を置いているなか、田路流だけは大都市でありさらに東京からも近い横浜に拠点を置いている。それ故に取っ付きやすいため、東京と神奈川では群馬に拠点を置く島田流よりも人気があるのである。

そうだからこそ、子供を捨てるなどということは親としては当たり前として流派としても言語道断なのだ。人気があり、有名であればあるほど一つのスキヤンダルが命取りとなるのだから。

「だから、蓮ちゃんを捨てたのを取り消しなさい！」

田路蘭への島田千代の説得ロール！

「嫌です。」

「聞く耳すら持たない……！」

失敗した！

「あのね、蘭。百歩、いや千歩譲って蓮ちゃんの素行があまりにも悪すぎてこうなつたとかならまだしも、才能が無いので捨てましたなんてどこぞの週刊誌やらにすつぱ抜かれたりしたら家が滅ぶわよ？」

「それならばその程度だったということでしょう。なんにせよ、あの娘のような才能の

無い人間は田路にはいません。」

「…ねえ、ずっと思ってたのよ。蓮ちゃんが才能が無いっていつていつていられるけれど、蓮ちゃんって聞いた話だとかなり整備とかの才能に溢れているらしいわよ?」

戦車乗りとしては未知数だけれど、流石に戦車を作れる才能はかなりおかしいと思うわ…。

「……………? 島田千代、貴女は何を言っているのかしら?」

「…え? いや、だから整備とか、戦車作成の技術とか…」

「……………蓮には整備など勉強させていませんし、ましてや戦車を個人で作るなんてできるわけではないでしょう。見え透いた嘘を言うなど貴女らしくありませんね。」

……………んー? まさか知らない? それか蓮ちゃんが嘘をついている……………?

たしかブラックプリンスとかシエリダンとか作ったって言っていたわよね…。確かめてみましょう。

「ねえ、蘭。三年以内に突然ブラックプリンスが現れたことってなかった?」

「ブラックプリンス? …………… ああ、確かにありましたね。大方夫が買ってきたのですよ  
うし、既に売り払ってありますが?」

「じゃあシエリダンは何?」

「あのアメリカ戦車ですか。あれは戦車道でも使用できませんからスクラップにしまし

た。」

「…じやあスピットファイアとシーファンクは？」

「ああ、あれは聖グロリアーナに寄付しました。ちようど冬季高校陸空合同戦車戦大会に使う戦闘機が足りていなかったそうなので良いタイミングでした。」

「ことごとく処分してるわね…。そのブラックプリンスとかシエリダンとかスピットファイアとかを蓮ちゃんと貴女の夫が作ったと蓮ちゃんは言っているのだけけど。」

「まさか。さつきから一体なにを目的に下らない嘘を言っているのですか？」

「だから蓮ちゃんと田路流のためよ。だから蓮ちゃんを」

「くだい！蓮を捨てたことを取り消すことはありません！あの娘は田路の家には必要ありません！」

「…いい加減に頭に来た。娘が必要ない？才能が無いから捨てる？一発殴ってやろうかしら？」

「ふざけてんじゃないわよ！貴女の都合だけで蓮ちゃんを捨てるなんて勝手にも程があるでしょう！」

「あのような才能無しなど田路の面汚しでしかありません！」

「ああもう！取り消さないって言うのならもういいわ！蓮ちゃんはうちで預かります！いいえ、いつそ養子にします！」

「ええいいでしょう！その方が後腐れが無くていい！」

「言質取ったわよ！今度しつかりと養子にする件で話し合いの場を設けさせてもらいますからね！そして蓮ちゃんも絶対に、島田の名に恥じぬ戦車乗りになります！」

「できるものならやってみればいい！今日はとつと出ていってください！」

「ええ、そうさせてもらおうわ！それじゃあね！」

バタン！

……………。

……………やってしまったあああ！

売り言葉に買い言葉、完全に勢いと怒りのみで色々言ってしまった。蓮ちゃんのことを確認もしていないのに養子にするだなんて言ってしまった。

しかも島田の名に恥じぬ戦車乗りにするとか啖呵切ってしまったし…うう、どうしよう…。

仕方ない、蓮ちゃんには説明した上で納得してもらおうしかないわね。うん。お酒飲みに行こう…。

《蛇足・W家元の飲み会》

「……………はあ？つまりその場のノリと勢いだけで養子にするなどと言ったと？」

「そうなのよしぽりんく。どうしよう、娘がまた増えちやったわー。」

「しぽりんと呼ぶな島田流。全く、貴女は昔から冷静なようですぐに熱くなるのですから。」

「うー。でも蓮ちゃんも風美花と愛理寿に負けず劣らず可愛いのよー。ええ、世界一よ

「！」

「ほう、私のまほとみほを差し置いて世界一などのたまいますか。世界一はまほとみほです。」

「いいえ、うちの三人よ！可愛いところを一人百個でも言えるわ！」

「ならば私は一人二百個でも言いましょう。」

「——やろうつてのかしら？」

「——ふん、望むところです。」

「風美花はそろそろ第二次反抗期に入るけれどなんとか親に反抗しようとして空回りしてるところとかあとご飯食べてるときの笑顔がとーってもかわいいのよあと愛理寿はまだ四つなのにとつても賢くてなんとか風美花についていこうとして後ろを追いかけてる姿とかがとつてもあどけなくて蓮ちゃんやんは普段しなれていない人への説明をわたたと手を動かしながら必死に伝えようとしてる姿がキュートだしあの金色の髪もとつても綺麗なんだからそうそう風美花が最近ギターとかを練習してるんだけどその時の——」

「まほは普段は感情を表に出しませんそれが故に時折溢れ出る喜びの表情がとてもいいんです。特にみほへみせる笑顔は年相応の女子のような笑顔でとても可愛くそれでいて美しいんです。みほは最近は昔のようなわんぱくさは鳴りを潜めています。時折溢

れ出てくる時の表情がとても破壊力があつて、この前のまほへのいたずらの時の笑顔はやられたまほのポカンとした表情もあわせてとっても可愛くて可愛くてたまりませんでした。それにみほはプレゼントにボコられぐまのボコをもらったときの表情が——」

二人が語り終える頃には朝日が昇りきっていたとかなんとか。

## 第三話 アリス・イズ・ワンダーガール

ホテルに泊まった次の朝、私と風美花を出迎えたのは千代さんだった。昨日言っていた通り本当に夜通し友人と飲んでいたそうだが、酔っているようには全く見えない。

「…お母様、まさかとは思うけど車なんて運転してないよね?」

「…あー、うん。意外とバレなかったわ?」

「お母様…。」

まさかの飲酒運転を認めた…。あの風美花すらも呆れ顔だよ…。

「…風美花、とりあえず通報しときますか?」

「いや、一応これでも母親だからやめてくれるかな…。はあ。それで? 蓮のことはどうなったんだい?」

「ああ、そうそう! その事なんだけれど…蓮ちゃん、家の子になる、なんてどうかしら!? 良いわよね、ね!」

なんだか千代さんの押しが強い気がするが気のせいだろう…多分。

……風美花の家の子に、か。たしかこういうのを養子になる、というんだっただろ



うか。

昨日、千代さんと別れたあとにホテルで風美花に聞いて知ったことなのだが風美花の家である島田家は戦車道の名家、それもなんとソ連のトハチエフスキー流やドイツのグデーリアン流、そして日本の西住流などと並んで有名な流派なのだそう。島田流自体は知っていたが風美花や千代さんがその人間とは知らなんだ。

島田流が重きを置くのは連携で、その次に重きを置くのが個の技術である。他の流派ではあまり見られない単独での奇襲や一对多の戦闘もままある流派なのだが、風美花曰く『やべーやつらを育ててチーム作つてもつとやべーやつを育てて頭に置いて連携取らせたら最強なんじゃね？』という流派さ。』：らしい。

なにかのスレツドで『島田流ってギリシアのスパルタみてーな流派だよなwww』というネタレスに『拠点防衛で三両で二万両以上の敵相手に戦って三百両も撃破したり、十両で三百両相手にほぼ無被害で完勝したりするのか：島田流やべえな。』というマジ（ネタ？）レスが返っていたのを見て笑った記憶があるが、あながち間違つてはいなかったらしい。流石に十両で三百両撃破は無理だと思うが。

しかし：私が一応学んできた流派である田路流はどちらかというと群を主とする流派だ。方向性の違う流派で学んでいた私が島田流の娘となつて良いのだろうか：。

「：その、養子になるといふのはとても嬉しい話なのですが、田路流の人間だった私が島

田流の家の養子になつても迷惑ではないのでしょうか？」

「ええ、迷惑などではないわ。蓮ちゃんがうちに来るだけでも嬉しいし、もちろん流派としても腕利きの整備士を抱え込めるのだから損はないわ。」

「それに、蓮が島田の家に新しい風を起こしてくれるかもしれないしね。」

「私が腕利きの整備士だなんて、そんな……」

「……蓮ちゃん、戦車を個人でまるまる作れるだけでも十分な才能だつてことを理解しておくべきよ？それで……養子になる方向で大丈夫かしら？」

「はい。私などでよければ……」

「蓮ちゃんだからこそよー！よーし、それじゃあ私たちのうちに帰りましょうか！」

「ストツプお母様、また運転するつもりじゃないだろうね？」

「……ばれなきや犯罪じゃないからセーフよセーフ。」

「アウトだよ……。もう家に連絡して迎えをよこしてもらつてるから、それに乗つて帰るよ。」

「えー。」

「えーじゃない。」

「……わかつたわ。それじゃ、ゆつくり待ちましようか。」

……斯くして、私が島田家の養子になることが決まったのであった。

少しして来た迎えの車に乗り、途中でお昼ご飯を食べつつ数時間。

私は群馬県にある島田流の本家へとやってきていた。

家の中の案内もほどほどに、早速整備の腕を見せてほしいと私は風美花によってガレージに連れてかれたのだが……

結論から言おう……

これはひどい。

連れてこられたガレージにはなぜか九七式中戦車がところ狭しと詰め込まれていた。それも47mm砲を装備した新砲塔チハではなく57mm砲搭載の旧チハが、である。

どうやら島田家には大きなガレージが五つと大きな倉庫？が二つほどあるようなのだが、聞くところによるとそのうち三つのガレージが旧チハで埋まり、倉庫まるまるひとつと半分がガラクタで埋まっているためまともに使える施設の方が少ないのだそうだ。

しかも、そのチハたちも数が多すぎて整備が行き渡っていないという。事実ボロボロのまま放置してあるチハも見受けられる。

「…ええつと、なぜこんなになチハが溢れ返ってるんですかね、風美花？」

そう風美花に聞きつつ見れば、風美花は死んだ目で遠くを見ていた。

「…お母様は旧砲塔のチハを集めるのと、ガラクタを集めるのが好きでね。この可哀想なチハ達もお母様によって世界中から集められたチハなのさ。」

「い、一体何台あるんですか…。」

「…確か少し前に『やつと六十四台目のチハたんを手に入れたわ！これで一〇式だって怖くないわ！』とか言っていたから、多分そのくらいだろうね。」

「ええ…。」

いくらチハを集めようと一〇式を倒すのは厳しいだろうし、そもそも整備できてないんじゃないや戦えないような…。

「……………とりあえず、今回は一番手前にあるそのチハのレストアなんてどうか。設計図やパーツなんかは無駄にたつぷりとあるから大丈夫だろう?」

そう言つて風美花が指差した先には、見事に大破したチハが鎮座していた。

そのチハはまだ大破してあまり時間はたつていないようだ。その表面はどうやら絵がかかれていたようだがほぼ掠れて見え、砲塔左側面は砲弾が掠めたのか挟れており、さらに砲身は曲がり、また車体は側面が削れたり、へこんだりしている。そしてなにより、横から大口徑砲の徹甲弾で撃ち抜かれたのかエンジンに見事に穴が空いていた。

明らかにまともな相手と戦つたとは思えないダメージだった。

「このチハですか…。一体何と戦つたらこうなるんですか。」

「確かM26パーシングだったかな。」

「は?なんですつて?」

「パーシングさ。ちなみに相討ちだったよ。」

「…M26つて実質戦後戦車、それも90mm砲搭載の重戦車ですよ。それとチハで戦つて相討ちとか冗談でしょう?」

「本当さ。ギリギリだったけどね。」

「……………それが本当なら乗員にあつてみたいものです。化け物か天才かのどつちかで

しよう、それ。」

「ははは、天才なのは私も認めるかな。……………おや、噂をすればなんとやらだね。来たよ  
うだよ。ほら。」

そう言いつつ風美花が私の後ろを指差す。チハでM26を倒すとかマチルダIIで  
チャーチルVIIを倒すよりも不可能なような気がするのだが。

「はあ…。一体どんな化け物なんですか…ね…え?」

「いた、おねーちゃん!」

風美花の指差した方を振り向くと…

そこには、風美花と同じ灰色がかかった茶髪をサイドテールにまとめた――

幼い少女が、風美花に向かって走っていた。

そしてそのまま風美花へと走り寄っていき…

「おねーちゃん!」

「いっふあつ!」

風美花の腹に突っ込んだ。

…うん、突っ込んだ。かなり速度が乗っていたので絶対痛い。少女の方はニッコニコしながら風美花に顔を擦り付けているが、風美花は…顔が少々青いような…まあ、なんとか受け止めきれているようだしいいか。

「ぐふっ…ど、どうだい蓮？可愛くて才能に溢れている妹だろう？」

「そうですね、あとは体格をどうにかすればプロラグビーでも通じそうなタックルでしたね。」

「ふふ、そうだろう？」

「ん〜♪あれ？おねーちゃん、その人はだれ？新しい門下生の人？」

「門下生というのもあながち間違いではないね。だけど、もつと良い人さ。」

「良いってどう？」

「ふふふ…なんと、愛里寿の新しいおねえちゃんなのさ！」

「…？大丈夫、おねーちゃん？おねーちゃんはおねーちゃんだけだよ？」

「んー、これは説明が難しいな…。養子…って言っても通じないだろうしなあ…」

「…まあ、今まで会ったことのなかったおねえちゃんとも。あ、私の名前は蓮です。よろしく。」

「んー…まあ、いいや！私は愛里寿！よろしくね、蓮おねーちゃん！」

愛里寿…なるほど、良い名前だ。しかしこの少女…というか幼女がチハでパーシング

を倒したとかやつぱり信じられん。

「はい。それで……どうやってこのチハでパーシングを倒したんですかね？私、とても気になるんですけども。」

「チハ？あ、ボコ号のこと!？」

「ボコ号？それがこのチハの名前なのですか？」

「うん！この子で戦うといっつも相手にボコボコにされちゃうけど、いつも耐えて耐えて、それで敵をやつつけるの！だからボコ！」

「なるほど……」

うん、確かにボコボコにされたようだが……ボコとは『ボコられぐまのボコ』だろうか。一部界限で人気で大洗だかにボコミュージアムとかいうテーマパークもあるとかないとかいうが……たしかアニメではひたすらに悪役にボコボコにされてばかりで反撃はしてなかったような気がする。というかあの負傷具合とかかわいらしいデフォルメキャラじゃなかったら下手するとR-18Gありえるような内容だったと思う。腕もげたり首折れたり目潰れたりとか……

うん、想像したら気持ち悪くなってきたし止めよう。

「でも、少し前の戦いでパーシングにやられちゃったの。ちゃんと撃たれる時に撃ってパーシングは倒したけど……ボコ号は動かなくなっちゃった。」



「…そもそもなぜチハでパーシングと戦っているのかというツツコミは無いですかね？」

「愛里寿がこのチハ以外に乗りたがらないからさ。お母様はこれを機にまずはマチルダⅡに機種転換させようとしているけれど…私は愛里寿には好きな戦車に乗って欲しいからね。だから蓮に、直してほしいのさ。」

「え、ボコ号直るの!?!」

う、愛里寿からの期待の視線が痛い。

「むむむ、恐らく直すことは出来ませんが…砲塔とエンジンはまるごと入れ替えてしまつた方が早いですね。いつそ新砲塔に改修してしまうのもありですが…どうしますか、愛里寿?ちよつと強くすることもできませんが。」

「しかも強くなるの!?!うん!蓮おねーちゃんお願い!ボコ号をパワーアップして!」

…とつても良い笑顔だこと。これはやってやるしかあるまい。うん、腕がなる。

「わかりました、やってみましょう。…:…:…ところで、装甲板とエンジンの替えと、あと…一式四十七耗戦車砲の在庫ってありますかね?」

「ふむ、前の二つはある。砲は…心当たりはあるかな。」

「では、そこに連れていってもらっても?」

「良いよ。それじゃあ、宝探しとしゃれこもうか。」

「宝探し!? 私も行く!」

「わかったよ。ほら、行くよ蓮。」

「はい。」

ゆつたりと歩いていく風美花を追って、私もガレージをあとにしたのだった。

《視点：愛里寿》

蓮、と金色の髪のお姉さんは名乗った。

おねえちゃんが連れてきた人だから変な人なんだろう、と思つてたらなんと私のもう一人のおねえちゃんなのだそう。ヨウシ、とかおねえちゃん…んー、どっちかわからないから風美花おねえちゃんと蓮おねえちゃんにしよう。風美花おねえちゃんがヨウシと言つていたけど、よくわからなかった。

蓮おねえちゃんは風美花おねえちゃんとかお母様とは違つてとっても綺麗な金色の

髪に青色の目だから本当におねえちゃんなのかはわからないけど……でも、ボコ号を直してくれるっていつてたしきつと優しい人なんだと思う。

しかも、直すだけじゃなくて強くしてくれるんだって。これでボコボコにされずにボコボコにできるね♪

どうなるんだろう……楽しみだな。

## 第四話 三姉妹の宝探し

風美花に連れられて向かったのは、千代さんが完全に占有してしまっているという倉庫だった。それも横浜にある赤レンガ倉庫と同じぐらいに大きい。

なぜこんなにでかいのか…。

「あー………やけに大きいだろう？ここはお母様がガラクタを買いまくるせいで溢れた物達をしまっておくための倉庫なのさ。だからかなり大きいのだけれど…これでも足りなかったのさ。」

「お母様はへんなの集めるのが大好きだからね！この前も長い銃とか買ってたし。」

「長い銃ですか？」

「ああ。たしか…ロシアのライフルだったかな？」

「…なんですか、千代さんは政府とでも戦争をするつもりなんですか？朝敵なんですか？」

「はははは………そうでないことを願うかな。うん。それじゃ、入ろうか。」

倉庫の中は、予想していたほど酷くはなかった。

倉庫の床から天井、手前から奥までほぼ等間隔に並び生える棚。

棚の下の方には大きめのものが置かれ、上の方には銃や弾薬のような軽めのものが置かれていたようだ。

しかし、どれもしつかりと整理されている。先程のチハの状況からもっと色々なものが山積みになってまともに使えない物ばかりかと思っていたからかなり予想外だ。

まあ、そんなところで私たち三人は宝探しもとい愛里寿のボコ号用の47mm砲探しをしている。

「……………というかこれ、戦車道とか関係なく集めているっぽい。だって戦闘機のP-51(？)が目の前に鎮座してるし…。」

「風美花、なぜここにP-51が…?というかなんで上部にバックミラーついてるんですかこれ。」

「すまない蓮、私は飛行機には詳しくないんだ…。」

うむむむむ、warthunderではずっとドイツと日本しか使ってなかったからアメ機はあまりわからん…。でもダイブブレーキとかついてないしA-36じゃ無さそうだしなあ…。だからといって20mm機関砲が生えてるわけではないしなあ。むむむ。

「おねーちゃん！また飛行機見つけたよ！しかも同じの二つ！」

「もう飛行機はいらないんだけどなあ…。私わからないし。」

「まあまあ、行きましよう風美花。」

「はあ…。それで？どれだい愛里寿？」

「これー！」

そう笑顔で指差した先には、二機の機体が鎮座していた。

ダークグリーン機の機体に、大きな一つのプロペラ。W字を描く特徴的な逆ガル翼の主翼とそこから生える前脚。片方の機体は片翼一門合わせて二門のガンポッドをぶら下げ、もう片方の機体はその主翼からその長い機関砲を覗かせている。そしてダイブレーキと、機関砲の方は爆弾懸架装置も備えている。

つまるところ、この機体は――

「す…スツーカーだあああああ！」

「うおつとお!?れ、蓮!?どうしたんだい!？」

「どうって、これですよこれ！スツーカーですよ！ユンカーズ社製、J u - 87『スツーカー』！うっわあー！本物を見れるなんて思っても見ませんでした！しかもこれG - 1型と、それよりも主翼が長いからD型後期の……うん、20m機関砲で急降下爆撃用の爆弾懸架装置ですから恐らくD - 5型ですね！うわー！動かしたい！飛びたい！急降下したい！ばらしたーい！」

「私ものつてみたーい！」

「すつー…か？でいーごがた？ごめん、蓮、私はさっぱりわからないよ。」

「ならば教えてあげましょう！」

「おっと、いけないことを言ったかな…」

「教えて教えて！」

「よろしい！この機体は1934年にドイツのユンカーズ社にて設計開発が行われた急降下爆撃機、『J u - 87』です！ちなみに『スツーカー』や『シュトゥーカ』といった愛称はドイツ語で急降下爆撃機を表す『S t u r z K a m p f F l u g z e u g』が元なので、本来はこの機体のみを表す略称ではないのですが、この機体がドイツ軍の用いた代表的な急降下爆撃機だったためこの名で呼ばれているのです！」

スツーカーにはいくつかのタイプと改良型がありまして、初期量産型のA型、その改良型のB型、B型の長距離型であるR型、艦載機型のC型、更なる改良を施したD型、対

地攻撃用に翼下に37mm砲をポン付けしたG型などと、第二次世界大戦を通して運用され続けただけあって多数のタイプと改良型があるので！それでこの二つは…」

「ストツプだ蓮、もういいから。」

「えー。」

「愛里寿までかい…。既に私は情報量が多過ぎて訳がわからないんだけど。」

「まだまだ話し足りないのに…。」

「そうだよおねーちゃん、まだまだ聞きたいよー。」

「二人とも…ここに来たのはなんの為だい？」

「え、スツーカーのレストアのためでは？」

「違うよ蓮おねーちゃん、ボコ号をパワーアップするためだよ！」

「あー、そうでした。おや、あれではないですか？口径は多分47mmぐらいですが。」

たまたま目に入ったそれっぽい砲を指してみる。が

「あれは…違うんじゃないかな？あ、ラベルが貼ってあるね。『47mm P. U. V.

v z. 36砲』…？蓮、愛里寿、これはなにかわかるかい？」

「わかんない！」

「だろーね。でもまあ、47mm砲でもこれは違うだろうね。名前から考えるに恐らく

ドイツだろうし。」



「むむむむ…。では、こっちはどうでしょう？」

近くに似たようなものがあつたのでそっちも聞いてみる。

「これは…あつたあつた。えっと、『試製九七式四十七耗砲』って書いてあるね。んー、日本の砲みただけけど、一式四十七耗戦車砲よりも古いみたいだね。」

「むむむむむむ。もし一式の方がなかつたら、調査の上で使えたらそっちを使いましょうか。」

「そうかい。」

結局一時間ほど倉庫の中をさまよつたが、一式四十七耗砲が見つかることはなかつた。代わりにUボート用の30mm機関砲が球状の砲塔ごとあつたり、ドイツの航空機機関砲であるMK103 30mm機関砲が二十基ほどあつたり、そもそも戦後の砲であるロイヤル・オードナンスL7 105mm戦車砲があつたり、数年前に一〇式に完全

に更新され、自衛隊から全車退役した74式戦車が鎮座していたりと語り尽くせないほどにさまざまなものがあったが。

そもそも、よく考えてみれば日本でかなりポピュラーなチハの砲となれば普通に売っているだろうから、変なのしかないここには無いのかもしれない。うん、きつとそうだろう。目の前に見える四式十五糎自走砲とか変なの最たるものだろうし。

「……………風美花、このホロ車、ちよつと本気で運用してみませんか？多分ティーガーとかでもワンパンでできますよ？」

「……この15cm砲は魅力的だけど、オーブントップだから駄目かな。」

「ねーねー、ボコ号の砲はー？」

「ここには無さそうですし、買いに行けませんかね？試製九七式の方が使えなかったときはそうするか……私を作るかのどっちかになりますね。」

「……え、蓮おねーちゃん、戦車の整備だけじゃなくて戦車の砲を作るの!？」

「はい。必要なものさえあれば戦車をまるまる一つ作れますよ。」

「すごい！それじゃあ自分で戦車を設計して自分で作れちゃうんだ！いいなー！」

自分で、設計をする。

なるほど、その発想は無かった。確かに今まで戦車やら戦闘機やらを作っていたが、それは全て父に先導されて既にある設計図を元に再現されたものだ。

無論、設計者への敬意も込めて出来る限り完璧なものを作ったが……なるほど、自分がその設計者の立場になるといふのは考えなんだ。

しかし……自力で設計するとなると、それについての知識が多く必要だ。トライ&エラーで自力で詰めても良いかもしれないが、そこは先人の遺産を頼らせて貰うとして……

問題は、目標だ。

いくら技術が、知識があろうとも目標となる地点が無ければなにも成し得ない。しかし、その目標を得るには私の見聞はあまりに狭すぎる。

……うむむ。

「設計、ですか……。愛里寿は、もし自分で戦車を作れたらどんな戦車を作りたいですか？」

「え、私が？ん、あ！センチユリオンの砲塔をでっかいボコにしたい！きつとかっこい

いよー！」

「ボコチュリオンとはまた面妖な……………」

「なるほど、ボコ…ということは好きなもの、ですか。」

好きなもの、好きなもの……………うーむ、牛乳、ヴィルベルヴィント、メーデー、メーデー、メーデー、デイスイズ スイレンエア 8146、スイレンエア 8146、スイレンエア 8146、メーデー……………あ、これ違う。なんでメーデーを発信してるんだ？

ふむ。

ヴィルベルヴィントなら、機関砲を30mmにしたツエルシュテラー45とか？でも、それはあくまで改修に過ぎないし、なによりそれ以上の改造は設計者に失礼かもだしなあ。

なら、対空戦車？

……………なるほど、対空戦車か。それなら弾をばらまけて楽しいだろうし、見映えも良い。

でも、どんなものだろう。愛里寿にとってのボコのような……………牛乳？

「なるほど、牛乳を高い水圧によって高速で空へ撃ち出す対空戦車……」

「うん、そんな対空戦車は嫌かな。それに対空戦車じゃどんなに頑張っても大抵砲が小さいから至近距離での撃ち合いが前提になるだろうし、そもそも戦車道では自分で設計した戦車は使用できないよ?」

「なん………だど? いえ、ほら、ドイツのアハトアハトとか対空砲ですしワンチャン……」  
「いや、そのアハトアハトを載つけた戦車は対空戦車じゃなくて重戦車じゃないかな? まあ対空戦車であつても戦車道に参加できるものはあるけれど、あまりポピュラーではないね。」

「ううむ……新しい発想は得れましたが、まだどうにもなりそうにないです。とりあえず、ありがとございませす、愛里寿。」

「えへへく♪どういたしまして!」ニ。パツ!

そう言い、愛里寿は花のような笑顔を咲かせた。

……なるほど、これは風美花がシスコン気味なのも頷ける笑顔だわ……。うん、口りは正義と言うのもあながち間違いいではないのかも……。はっ! いかんいかん、思考が変な方向に進んでいた。カット、カット!

「蓮、大丈夫かい? ぼおつとしていたようだけど。」

「あ、はい。大丈夫です。しかし…ボコ号はどうしましょうか。砲塔はなんとかありませんが、やはり砲は繊細ですしできれば正規の物が良いですけどね…」

「んー？ねえ、蓮おねーちゃん。ここにあるものはへんなのばっかりだから、ここにあつたらそれも変な砲なんじゃないかな？」

「……なるほど。そのあたりどうですか、風美花？」

…おや、風美花の反応がない。一体どうしたのやら……

んん？なぜか風美花はぼかんとしている。ああ、なるほど……

「その発想はなかった、とかですかね？」

「んん。っ！……ハハハハハ、ソナナワケナイダロウ？私はきつと砲塔ごとここにあると思つてたのサ！」

「言い訳は見苦しいよおねーちゃん！」

「ぐふう！」

「あー……うん。午後五時四十二分、ご臨終です。」

「死んでないからね!?!はあ…。とりあえず、もう少し探すかい？」

「いえ…そもそもここに来た初日に色々するのもどうかと思いますし、今日は打ちきりましょう。することは試製九七式の情報収集と、千代さんから許可を貰うことですか

ね。」

「許可は大丈夫だと思うかな。どうせ倉庫の肥やしだしね。おっと、噂をすればなんとやらみたいだね。」

『風美花——愛里寿ちゃん！蓮ちゃん！蓮ちゃん！ご飯よ——出ておいで——』

「ご飯！晩ご飯だよおねーちゃん！ほら、早くいこう！」

「晩ご飯……牛乳はありますかね？」

「あるんじゃないかな？ほら、蓮も行くよ。」

牛乳があるならそれは素晴らしい晩ご飯だ。ふふふ、とても楽しみだ。

《視点：風美花》

うん、どうやら蓮と愛里寿は仲良くなれているようでよかった。愛里寿は人見知りな

ところがあるし、蓮は……まあ事実上の引きこもりだったわけだから心配だったけど杞憂だったみたいだね。

しかし……飛行機か。私はさっぱり興味がなかったけれど、蓮や愛里寿はそうではないみたいだ。戦車一筋だから問題ないと思っていたけれど……あ、そういえば私が行く予定である聖グロリアーナ女学院に、飛行機も含めた戦闘をする大会があるんだっとうな気がする。たしかお母様に飛行機も多少は学んでおくべきと言われた記憶がある。

蓮に、教えを乞うか。あの……じえーゆー八七のときの語りから考えるに多分相当の知識を持っているんだろうしね。

……ふふ。まさか最初に私に新しい風を吹きいれてくれるなんて、やっぱり蓮は面白い。

蓮も愛里寿の言葉でなにか着想を得たようだし、この先が楽しみかな。